第４章　その他の遺跡

菅沢遺跡以外で調査を実施したのは、滝が谷遺跡、後畑遺跡、青野遺跡、赤谷遺跡、川立遺跡、丸尾Ⅱ遺跡、朝倉遺跡、東城蓮城跡、上谷遺跡の９遺跡である（第３図）。これらの遺跡は明確な遺構が検出されなかったが遺跡一部の可能性があるので以下に概要を記す。

１．滝が谷遺跡

滝が谷遺跡は出雲市多伎町久村の後谷川左岸、標高約 80 ～ 100m の丘陵上に位置する。対岸の砂原の小丘陵上には砂原小山横穴墓・後谷横穴墓などの古墳の存在が知られている。調査は工事対象地について、丘陵上の小緩傾斜地ならびに古墳墳丘の可能性のあるマウンド状地形についてトレンチ調査を実施した。

第１トレンチ（第 45 図）　丘陵途中の小平坦面である。調査時は雑木林であった。表土直下に凝灰岩塊の混入した黄褐色粘質土を検出した。明確な遺物・遺構は検出できなかった。

第２トレンチ（第 46 図）　丘陵痩尾根部分に当たる。調査前は雑木林・一部竹林であった。堆積層には表土下に地山凝灰岩の礫化したものが混じる土層が被覆するものの、明確な遺物・遺構は検出されなかった。

第３トレンチ　丘陵痩尾根の中央部が流水によってくぼんだ地形であるが、直径 1.5 m程度の大岩が露出していたため、祭祀が行われている可能性を考慮し、大岩周辺ないし下側にトレンチを設定した。いずれも遺物・遺構は確認されず、表土下はすぐ凝灰岩塊を含む粘土層からなる地山と判断された。

第４トレンチ（第 47 図）　痩尾根を貫けたところにある緩傾斜地である。表土下は、凝灰岩塊の混入した赤褐色粘質土層であった。遺物・遺構は検出できなかった。

第５トレンチ（第 48・49 図）　丘陵先端に近い尾根にみられるマウンド状を呈する部分で、調査前は雑木林であった。古墳の可能性があるため、尾根に対して直行する方向（東西）、及び、尾根側（南）にトレンチを入れ、主体部の想定される頂上部は若干拡張を行った。結論的には、表土下がただちに地山黄褐色粘質土層であり、主体部の痕跡も確認されなかった。また、墳端を示す溝など加工痕跡についても、もっとも遺存状況のよいと思われれる尾根筋上（南トレンチ）はなだらかな自然傾斜を呈しており明確な加工は確認できなかった。このほか調査前に測量を実施したが、平面的にも不整形であった。

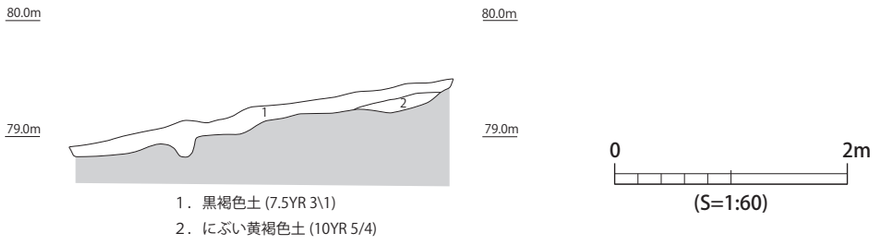
第６トレンチ（第 50・51 図）　第５トレンチの上に位置する同様にマウンド状を呈し古墳の可能性のある部分である。オープンカットの予定地である。第５トレンチ同様、尾根に対して直行する方向（東西）、及び尾根側（南）にトレンチを入れ、主体部の想定される頂上部は若干拡張を行った。結果は第５トレンチ同様、表土下が直ちに地山黄褐色粘質土層であり、主体部の痕跡も確認されなかった。墳端の加工痕跡についても、東西南でなだらかな自然傾斜を呈しており、加工は確認できなかった。平面的にも不整形である。

第７トレンチ・SK01（第 52 図～第 54 図）　第１～第６トレンチのある尾根の西側に所在する別な尾根上の平坦地に位置する。現状はシダの密生した藪で、ところどころに松が生えていた。腐蝕土が厚く堆積した下に若干の表土層が存在するが、その下は直ちに地山であった。トレンチ内に一箇所直径 50㎝、深さ 25㎝程度の土坑状の部分を確認した。全体に炭化物が混入するが、樹

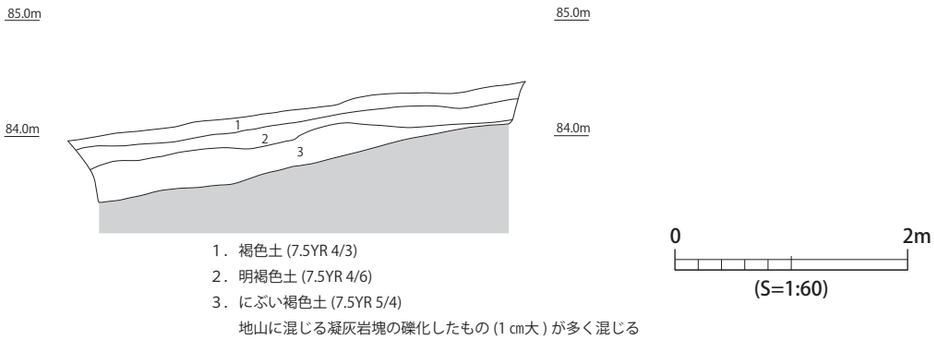
皮状を呈しており、人工物か、あるいは植物（松）の根痕跡かにわかに判断しがたいものであった。遺物は出土していない。

その他のトレンチ（図版 28 上） いずれも近接トレンチと同様の状況であり、遺物・遺構は確認されていない。

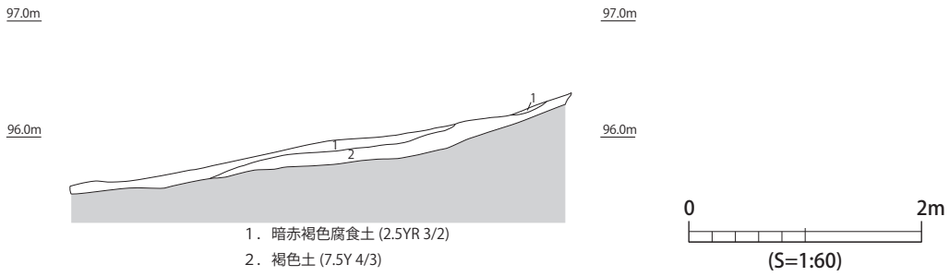
以上のトレンチ調査の結果、古墳と想定されていた第 5 ・第 6 トレンチのマウンド部分についても古墳の可能性は少ないと判断されるにいたった。その他のトレンチからも遺物の出土はなく、第 7 トレンチに土坑状のものが検出された（第 53 図・54 図・図版 28 下）。



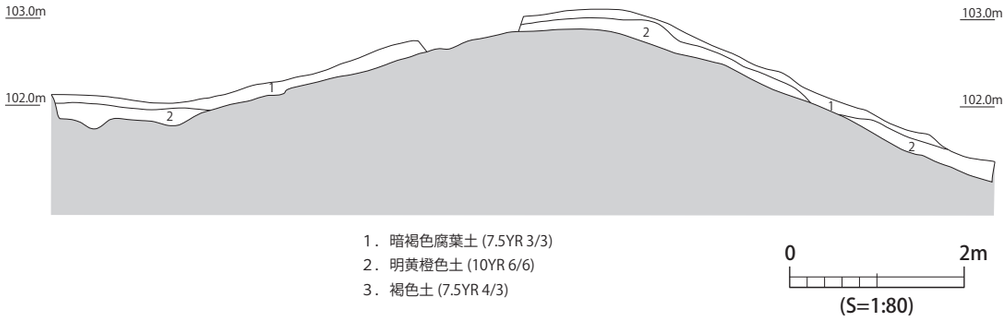
第 45 図　滝が谷遺跡トレンチ 1 土層図



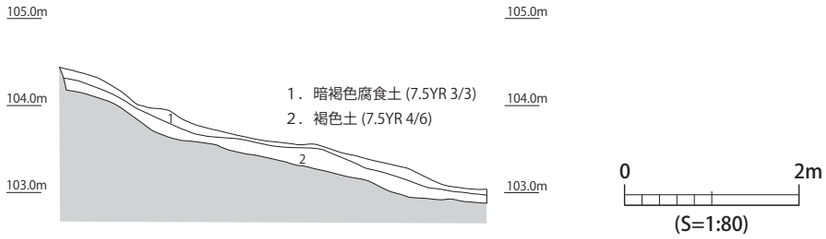
第 46 図　滝が谷遺跡トレンチ 2 土層図



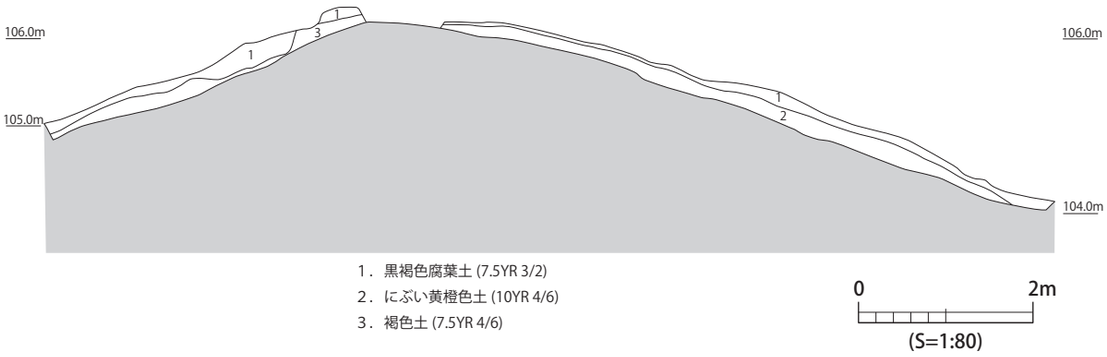
第 47 図　滝が谷遺跡トレンチ 4 土層図



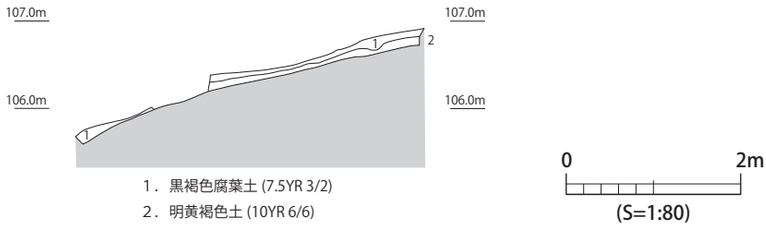
第 48 図　滝が谷遺跡トレンチ 5 土層図



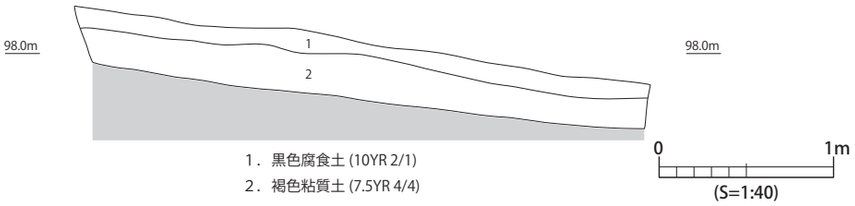
第 49 図　滝が谷遺跡トレンチ 5 南側拡張土層図



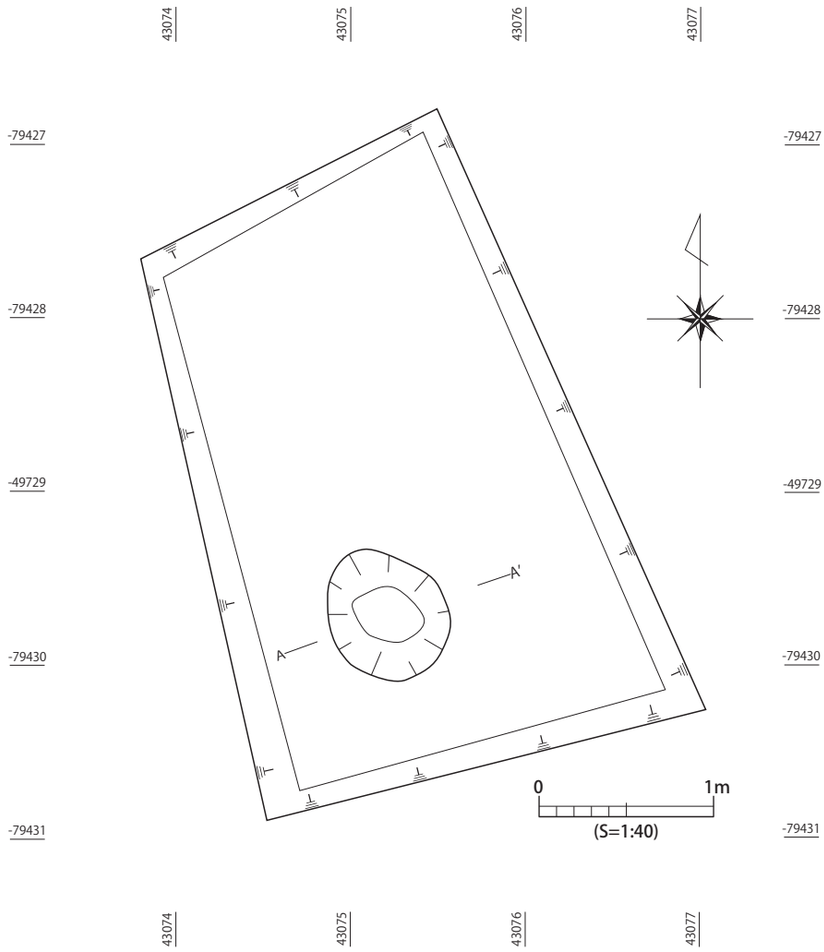
第 50 図　滝が谷遺跡トレンチ 6 土層図



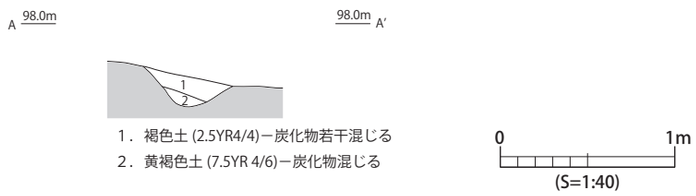
第 51 図　滝が谷遺跡トレンチ 6 南側拡張土層図



第 52 図　滝が谷遺跡トレンチ 7 土層図



第 53 図　滝が谷遺跡トレンチ 7 SK01 平面図

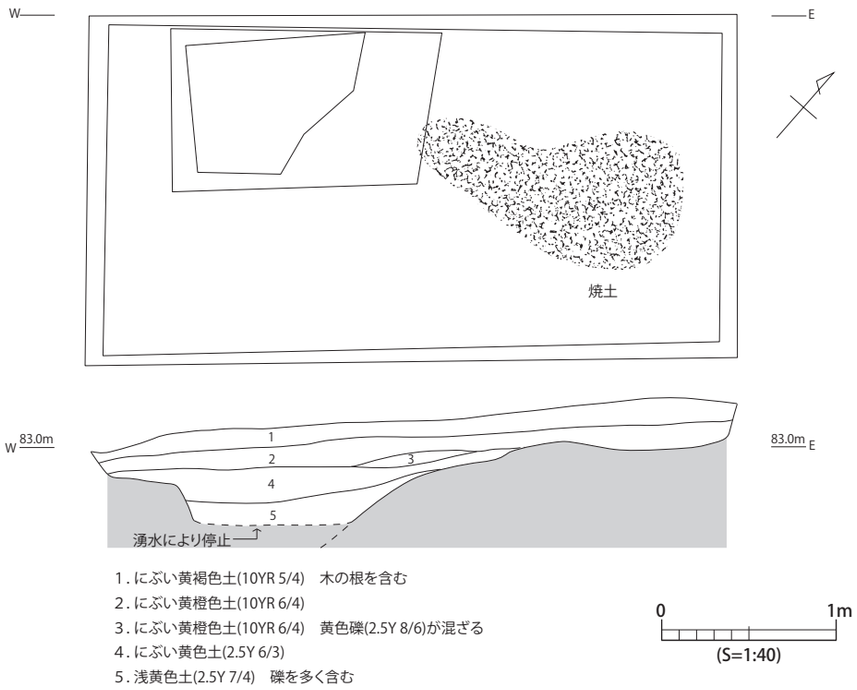


第 54 図　滝が谷遺跡 SK01 土層図

２．後畑遺跡

後畑遺跡は御茶屋場川右岸の丘陵および段丘上に広がっている。国道９号からは、市道山の空後畑線を 500 mほど南にはいったあたりに位置する (第３図)。トレンチは、御茶屋場川右岸の丘陵裾部にある平坦地に設定した。旧土地所有者によれば、この平坦地は、当初は水田、後に畑として耕作されていたとのことである。

調査区は２× 3.7 mで設定した（第 55 図)。山側では、地表面下、30㎝（標高 83 m）で地山に到達する。地山は、黄色の岩盤をしており、谷側に向けて傾斜していく。谷側は湧水のため、地表面下 70㎝、標高 82.6 mまでで掘削を停止している（図版 29 上)。地山直上で木炭粉・焼土の広がりがみられた。60 × 90㎝の楕円形をし、谷側にむけて傾斜しながら広がっていた。時期は不明である。遺物は出土していない。



第 55 図　後畑遺跡トレンチ実測図

３．青野遺跡

青野遺跡は出雲市多伎町小田に所在する。国道９号からは直線で約 400 m入り、柳谷、小田余草の集落からは 250 ～ 400 m離れている。標高は 100 ～ 120 m前後で、尾根から谷部に広がる。日本海を眼下に望む眺望の開けたところに立地している（第３図)。

調査区は計９か所設定した。トレンチ１・２は東西方向に伸びる尾根の鞍部に設定した。いずれも表土下で地山に達し、明確な遺構・遺物とも検出されなかった（図版 30 上)。

トレンチ３は西向きの斜面に設定した。表土下に礫混じりの層が 80㎝前後堆積しており、遺構・遺物とも検出されなかった（図版 29 下)。

トレンチ４・６～９は、北西に面した緩やかな谷の斜面に設定した。トレンチ４と９では木炭・

焼土混じり層が見られた。この層には他の遺物は含まれておらず、時期は不明である。トレンチ６は尾根上に設定したが明確な遺構・遺物とも検出されなかった。トレンチ７・８は南斜面に設定した。堆積土層はみられたが、遺物は含まれておらず、遺構も検出されなかった。

トレンチ５は北西に延びる尾根の先端に設定した。表土下で地山となり、遺構・遺物とも検出されなかった。なお、用地境（杭ＤＴ‐33 南 40 m）で炭窯跡 1 基が確認された。この炭窯は柳谷集落から延び、遺跡の中央を横断するようにはしる道に接して造られている。平面はいちじく形で全長約 4.7 m、焚口幅 3.5 ～ 4.0 mで、焚口は幅 0.5 mある。内部は完全に埋没しておらず、築窯時期は近世以降と考えられる。

まとめ　眺望の開けた立地であることから集落跡などの遺構が想定されるが、調査の範囲内では明確な遺構・遺物とも検出されなかった。調査対象地に関しては炭窯や道の造成など、近世以降に積極的な土地利用が行われたと考えられる。

４．赤谷遺跡

赤谷遺跡は出雲市多伎町口田儀に所在する。国道９号からは市道赤谷道を南に 900 mほど入る。遺跡は、市道とほぼ並行して南北に流れる赤谷川両岸の丘陵上から斜面にかけて広がっている。（第３図）このうち、調査対処となったのは、市道赤谷線の西側丘陵斜面である。

１～４トレンチは東向きの斜面に設定した。１～２トレンチは旧水田耕作土下に礫混じりの造成土がみられる（1 トレンチ第３層）。聞き取り調査によれば湿田で耕耘機がはまるため採石場から石を運び埋め立てたとのことである。その下層は、粘質土混じりの礫層（同４・７層）、流木を含んだ礫層（同５層）、粗砂層（同８層）がみられる（図版 30 下）。これらは土石流などにより堆積したものと考えられる。

３～４トレンチは耕作土下に造成土があり、地山となる。遺構・遺物とも検出されなかった。５～８トレンチは南北方向に延びる尾根の東斜面に設定した。標高 110 ～ 129 m前後である。水田を営むため削平や盛り土をして平坦地に造成されている。５・７・８トレンチは、耕作土下に１～２層の堆積層があり、その下層が地山となる（図版 31 下）。遺構･遺物とも検出されなかった。６トレンチは耕作土下・造成土下に、暗褐色粘質土が 60㎝以上続く（図版 31 上）。このトレンチのあたりはもともと谷状地形となっていたと考えられる。９～ 10 トレンチは東西方向に延びる尾根の南緩斜面に設定した。尾根は岩盤が露出した痩尾根である。斜面のいたるところに尾根上から崩落した礫や岩が露出している。表土下に礫混じりの堆積層がみられる（図版 32 上）。人口的な土地利用を行ったと思われるが明確な遺構・遺物とも検出されなかった。

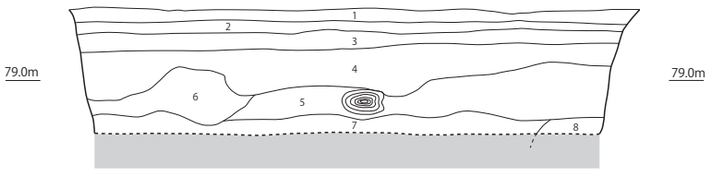
まとめ　近世以降の陶磁器が若干出土したが中世以前の明確な遺構・遺物は検出されなかった。遺跡は広範囲に及ぶものと想定され、調査対象地はその縁辺部であったと考えられる。

赤谷遺跡出土遺物

図版 39-1 は、試掘トレンチ２のオリーブ灰粘土から出土した。陶器製の灯明皿である。推定される年代は 19 世紀以降とみられる。2 はトレンチ５の耕作土から出土した土器。七輪類のサナとみられる。3 はトレンチ６から出土した肥前系の染付磁器碗である。

５．川立遺跡

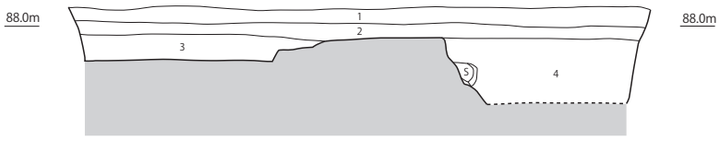
川立遺跡は出雲市多伎町口田儀の田儀川左岸、標高 15 ～ 16 mの川岸（旧水田）に所在する。（第３図）トレンチは道路橋脚予定地、及び排水路付け替え予定地に１～４トレンチ（いずれも３×３m）



1．黄褐色土 (10YR 5/6)－耕作土
2．オリーブ灰色土 (2.5GY 5/1) －耕作土
3．オリーブ灰色土 (2.5GY 5/1) に握り拳大～人頭大の礫が混ざる－造成土
4．オリーブ灰色粘質土 (5GY 5/1) に礫が混ざる
5．オリーブ灰色礫層 (2.5GY 5/1) に粘質土、未分解有機物が混ざる
6．明オリーブ灰色 (2.5GY 7/1) ～オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 粘質土
7．オリーブ灰色礫（握り拳大～人頭大）層 (2.5GY 6/1) に粘質土が混ざる
8．オリーブ灰色粗砂層 (5GY 5/1)

0　1m
(S=1:60)

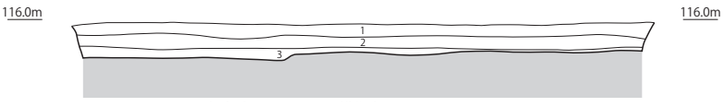
第 56 図　赤谷遺跡トレンチ 1 土層図



1．褐色土 (10YR 4/4)
2．灰黄褐色土 (10YR 6/2)－旧水田
3．灰黄褐色土 (10YR 6/2) ～明褐色土 (7.5YR 5/6) に地山白色礫が混ざる－造成土
4．明褐色土 (7.5YR 5/6) ～褐灰色土 (10YR 5/1)

0　1m
(S=1:60)

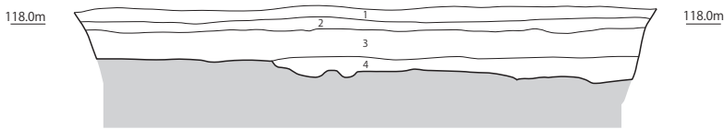
第 57 図　赤谷遺跡トレンチ 4 土層図



1．褐色土 (10YR 4/4)－耕作土
2．褐灰色土 (10YR 5/1)－床土
3．灰黄褐色土 (10YR 5/2) ～黒褐色土 (10YR 3/1)－造成土

0　1m
(S=1:60)

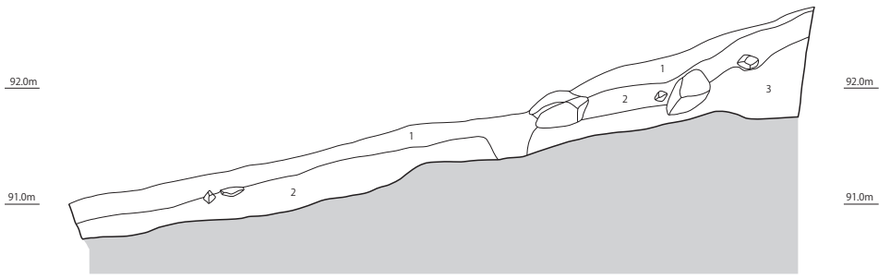
第 58 図　赤谷遺跡トレンチ 5 土層図



1．にぶい黄褐色土 (10YR 5/3)
2．褐色土 (10YR 4/4) ～褐灰色土 (10YR 5/1)
3．にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
4．暗褐色土 (10YR 3/3)

0　1m
(S=1:60)

第 59 図　赤谷遺跡トレンチ 7 土層図



1．腐葉土
2．褐色土 (10YR 4/4) ～にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)
3．明黄褐色土 (10YR 6/8) に握り拳大～人頭大以上の礫が多く混ざる

0　1m
(S=1:60)

第 60 図　赤谷遺跡トレンチ 9 土層図

を設定して地表下 1.0 ～ 1.5 mまで図化した後、最後に確認のために重機による深掘りを実施した。

１トレンチ（橋脚部分） 約 20㎝表土下に、にぶい黄褐色・黄灰色粘砂質土（３・４層）の旧水田床土が存在する（図版 32 下）。この床土の下は東田儀川側と西山川側に分かれており中央には縦方向、山川に転んだ石列が認められ、外側には溝状遺構や添えられた木が認められる。この石列はトレンチ北東断面でも確認でき、川に並行して石列があったことが確認され、圃場整備前の水田境界と考えられる (東田儀川側に低い水田が存在したのであろう)。７～ 11 層は少量の炭化物を含んでいる。12 層は河川活動により角の取れた円礫・岩塊（10 ～ 50㎝大）と砂礫層からなり、壁の崩落の危険性があるため礫･岩塊は図化していない。さらに下層に続いている模様である。湧水も多く、旧田儀川河川流路と考えられる。遺物は出土していない。

２トレンチ（用水路移転予定地田儀川側） 約 20㎝の表土下は、標高 14 m付近まで褐灰色ないし灰色の粘砂質土・砂質土が互層状に堆積する（図版 33 上）。この間には大型円礫はみられない。この下には鉄分を含む灰色砂層（９層）があり、さらに下層では重機よる深掘りで、１トレンチ同様の角の取れた円礫･岩塊（10 ～ 50㎝大）と砂礫層を確認した（同層はさらに下層に続いている）。この層は１トレンチ同様に旧田儀川河川流路と考えられる。遺物は出土していない。

３トレンチ（用水路建設予定地中間） 約 20㎝の表土下は標高 14 m付近まで黒褐色まで灰色の粘質土・砂質土の互層状を呈している。ただし、２トレンチに比べ各層間の変異は大きく、砂質・粘質の差が明瞭であり、５層を中心に 10 ～ 20㎝大の円礫も認められる。調査は標高 14 m灰色砂層で止めた。遺物は出土していない。

４トレンチ（用水路建設予定地山側） 山寄りの一番高い水田に設定したトレンチである。１～３層はにぶい黄褐色粘土と礫からなるが、塩化ビニルパイプなどが埋められており、買収前の圃場整備後の水田の造成土層である。４～６層は黄灰色の粘砂質土で一部に炭化物が混入、溝状の落ち込みも確認されるが、圃場整備前の水田に関わるものと考えられる。標高 14 m以下には１～３トレンチ同様の灰色砂と大型円礫の混合層がみられる。遺物の出土はなかった。

以上、４トレンチではいずれも標高 14m 前後で、10 ～ 50㎝大の大型円礫と灰色砂の混合層に達した。この層は多量の湧水を伴うことからかつての田儀川河道と考えるのが妥当である。トレンチ間では現地表面には高低差があるものの大型円礫層の確認レベルは約 14.0m と同一であることから、近接する時期の河川の作用によるものと考えられ、なおかつその規模は極めて大きい。その上、いずれの地点でも重機による深掘りでこの河川堆積層下の別な土層に達することはできず、堆積作用の広がりを念頭に置くと、調査対象となる範囲においてはこの礫層の下に遺跡が残っている可能性は極めて低いと考えられる。大型円礫層上については、圃場整備前ないし圃場整備による水田層と考えられるが、現在の耕作土中より遺物が若干採集された。但し、明確な遺構などの存在は確認できなかった。

６．丸尾Ⅱ遺跡

丸尾Ⅱ遺跡は田儀川の支流、仙山川の両岸一体に広がる（第３図）。遺跡とその周辺は水田となっているが、圃場整備はされていない。水田面の標高は 81 m前後である。

１トレンチは仙山川の右岸に設定した（第 61 図）。水田耕作土下は旧水田耕作土となる。その下層が河川堆積層と考えられる粘質土となり、さらに下層で砂礫層に変わる（図版 33 下）。砂礫層上面の標高は 80.8 mで西（現在の川側）に向けて下がっていく。河道が固定される以前は、谷

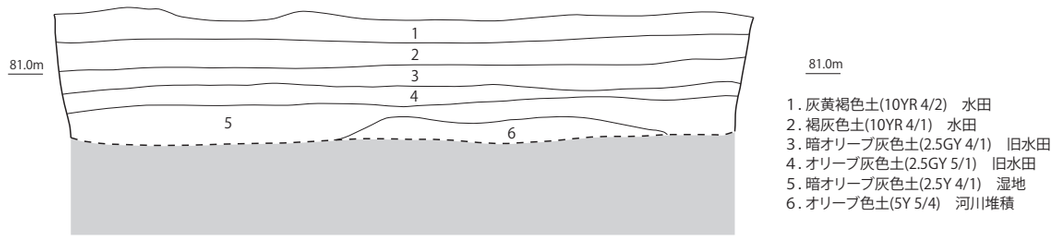
筋に沿って流路を変えていたことが考えられる。明確な遺構は検出されなかった。遺物は水田耕作土中から近世陶磁器が６点出土している。

２トレンチは仙山川左岸の丘陵裾部に設定した（第 62 図）。厚さ約 60㎝の造成土があり、その下層は旧水田耕作土になる（図版 34 上）。旧水田跡以外の遺構、遺物とも検出されなかった。

丸尾Ⅱ遺跡出土遺物

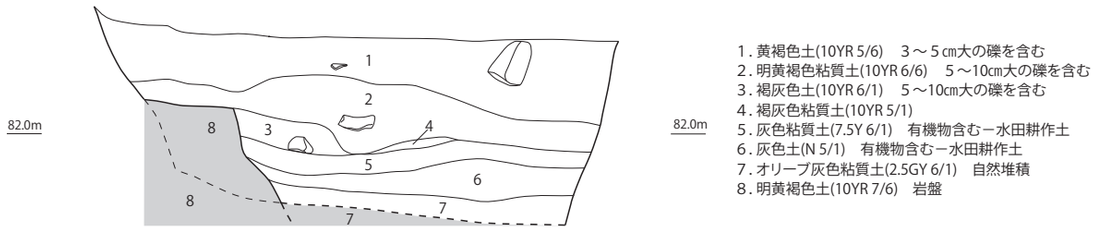
図版 39-1 ～ 5 は試掘トレンチ 1 の耕作土から出土した肥前系染付磁器である。1 は草花文が描かれる丸形碗で、推定される年代は 18 世紀後葉以降とみられる。2 は染付により内面に圏線を描く。外面に短直線文を描く丸形碗で、推定される年代は 18 世紀後葉とみられる。3 は外面に丸文を描く丸形碗。推定される年代は 18 世紀以降とみられる。4 は外面に山水文を描く丸形碗で、推定される年代は 18 世紀末とみられる。5 は外面に半花文を描く丸形皿で、推定される年代は 18 世紀以降とみられる。

T1

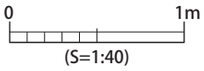


第 61 図　丸尾Ⅱ遺跡トレンチ 1 土層図

T2



第 62 図　丸尾Ⅱ遺跡トレンチ 2 土層図



７．朝倉古墳

朝倉古墳は仙山川を東に望む丘陵上に位置する。国道９号からは約 400 m南にはいった所にあり、遺跡の西側には国道９号に接続する市道日ノ尾線が通っている（第３図）。丘陵の標高は 115 m～ 143 m前後で、最高所には送電線鉄塔が建っている。丘陵の地山は粘質土（18 トレンチのみ岩盤が確認）である。このため、斜面には地滑りや土砂の流れ出した跡があちこちでみられる。それに対して、尾根上には比較的広い平坦地がみられ、古墳のような高まりを認識できる地点もある。トレンチは古墳、横穴墓などの遺構を想定し、計 20 箇所に設定した。

１～３トレンチは表土下で地山となり、遺構・遺物とも検出されなかった（図版 35）。

４～７トレンチは鉄塔の建つ丘陵最高所から東に延びる丘陵上に設定した。いずれも表土下で地山になり、遺構・遺物とも検出されなかった。

８トレンチは表土下で地山となり遺構・遺物とも検出されなかった。

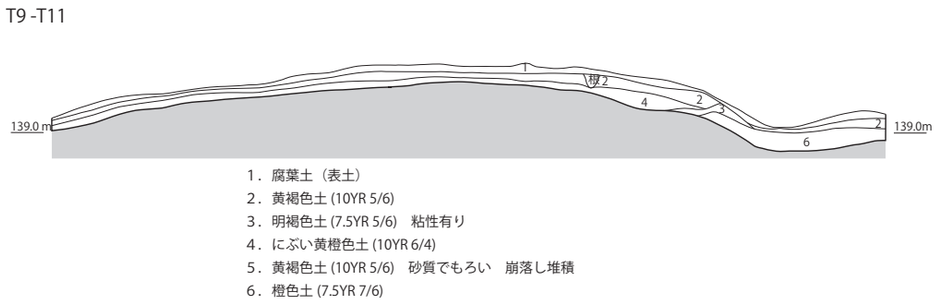
9～11 トレンチは鉄塔から南に延びる丘陵先端に設定した（図版 34 下）。測量調査では、一辺約 7.5 m、高さ 50㎝の方墳の可能性が考えられた。墳丘は、南（丘陵先端）側では 50㎝ほどの高まりが認識できるものの、北側・東側に墳端は認められない（第 63 図）。西側の墳端は、尾根筋と平行して通る道によって削られ不明である。トレンチは古墳の主軸にあわせて十字に設定した。各トレンチとも表土下で丘陵全体を覆う黄褐色土、明褐色土があり、地山になる。埋葬施設は確認できず、盛土も失われた墳丘の可能性があるが、確実に古墳であるとは判断できなかった。

13 トレンチは丘陵西側の平坦地に設定した。平坦地の西には南北方向に通る道がある。堆積土層はみられたが遺物は含まれていなかった。

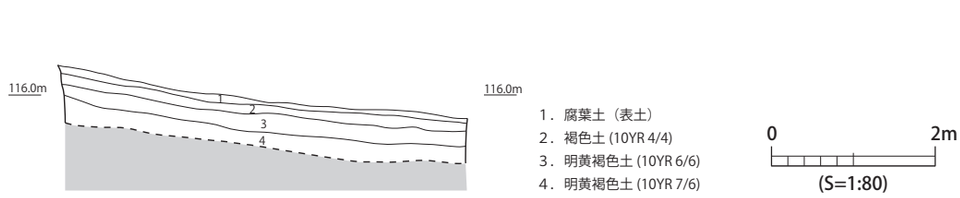
14 トレンチ、20 トレンチは丘陵北側の緩斜面に設定した（第 64 図）。堆積土層がみられたが、遺物は含まれておらず、遺構も検出されなかった。

15 トレンチは、丸尾Ⅱ遺跡のある谷を望む丘陵先端、標高 115 m付近に設定した。古墳の可能性を想定したが、表土直下で地山となり、明確な墳丘や遺物は確認できなかった。

16～19 トレンチは、横穴墓を想定し、尾根から 10 m前後下がった斜面に設定した。17 トレンチの南には炭窯跡 1 基が存在する。平面がいちじく形で長さ 5.7 m、焚き口幅 1.4 m、最大幅 3.7 mある。焚き口前面には作業場がある。炭窯は天井が失われているが、内部はほとんど埋まっておらず、近現代のものと考えられる。18 トレンチは表土下で岩盤に、ほかのトレンチは粘質土の地山になる。いずれのトレンチからも遺構・遺物は検出されなかった。



第 63 図　朝倉古墳トレンチ土層図（1）



第 64 図　朝倉古墳トレンチ土層図（2）

８．朝倉遺跡

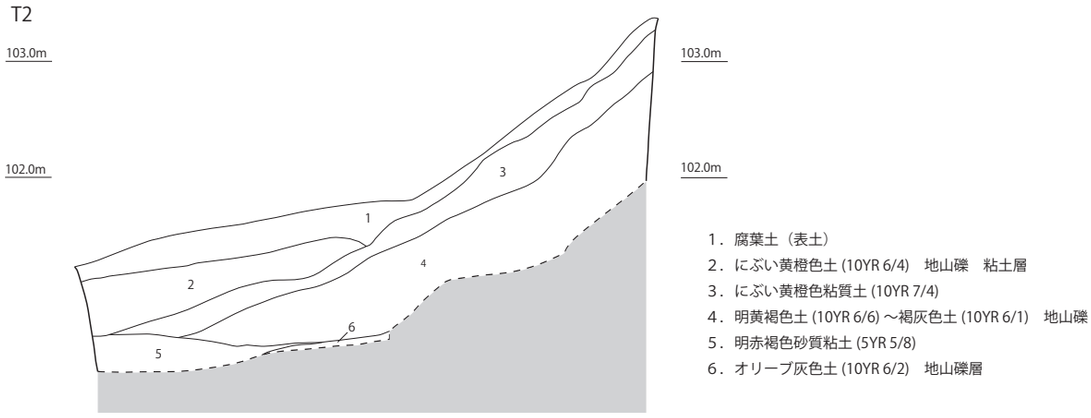
朝倉遺跡は朝倉古墳から西へ200 mほどいったところに位置する（第３図）。標高は100 m前後で丘陵上と谷部からなる。トレンチは６箇所設定した。

旧土地所有者によれば、かつては水田として利用していたとのことである。４～５トレンチを設定した平坦地は水田の畦が残っている。３・６トレンチを設定した平坦地は、現在、笹竹に覆われ鬱蒼としている。３トレンチの西にも南北方向に畦がみられた。谷部は、１トレンチ付近は平坦だが、２トレンチにむけて凸凹とした地形が続いている。この地形は、旧土地所有者への聞き取りから、昭和38年（1963）の大水害で土砂が崩落したためとわかった。この水害を機に、水田をやめ、植林をしたとのことである。

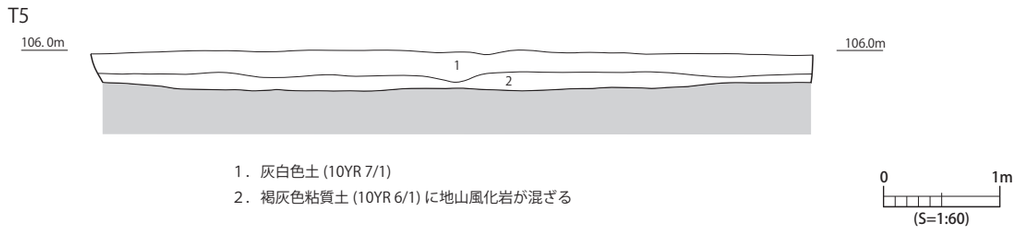
１トレンチ　谷部の出口付近に設定した。表土下に造成土があり、その下層で旧水田耕作土となる。旧水田跡以外の遺構、遺物とも検出されなかった。

２トレンチ　谷筋の最も奥に設定した。表土下に水害による崩落土と考えられる地山レキ・粘土層が堆積する。その下層は、水田耕作土と思われる明赤褐色砂質粘土がみられる。旧水田跡以外の遺構、遺物とも検出されなかった。

３・６トレンチ　丘陵上は水田開発のため旧地形をとどめていないと考えられた。そのため、トレンチは旧地形をとどめている可能性がある丘陵に近い地点に設定した。３トレンチ・６トレンチとも丘陵の傾斜面を確認できたが、遺構は検出されなかった。３トレンチから石見焼片が１点出土している。



第65図　朝倉遺跡トレンチ土層図（１）



第66図　朝倉遺跡トレンチ土層図（２）

４・５トレンチ　４トレンチは表土下に地山レキからなる造成土が広がる。トレンチ東端を延長、さらに深く掘り下げたところ、丘陵傾斜面が確認できた。遺構・遺物とも検出されなかった。5トレンチは、表土下で漸移層をはさんで地山になる。5トレンチのある丘陵先端部を掘削した発生土で４トレンチのある谷部を埋めていることが考えられる。陶器片が１点出土したが明確な遺構は検出できなかった。

朝倉遺跡出土遺物

図版 39-1 は、試掘トレンチ３の表土から出土した石見焼の細片である。2 は内外面に鉄釉がかかる陶器甕で、推定される産地は肥前系唐津である。

９．東城蓮城跡

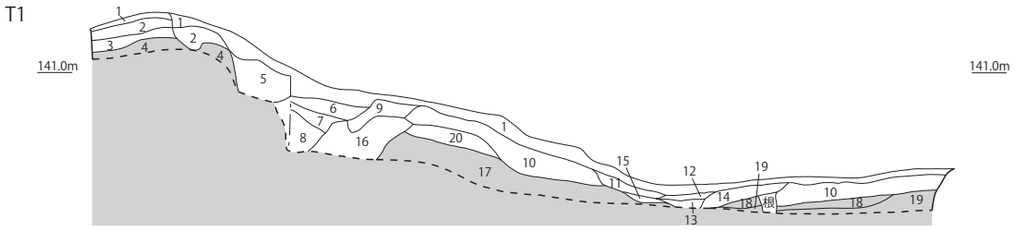
東城蓮城跡は国道９号と県道池田久手停車場線の交差点から 300 m南東の丘陵上に位置する。（第３図）丘陵裾をめぐるように仙山川が流れている。遺跡周辺では、城蓮城跡、朝倉彦命神社館跡の城館遺跡の存在が知られている。また、丘陵の南には延命山法重寺の跡が残っている。

丘陵の標高は 115 ～ 140 m前後である。標高 146 mの最高所には送電線鉄塔が建っている。調査区は城館関連遺構を想定し尾根上を中心に計８箇所に設定した。

１トレンチは標高 136 m前後の尾根上に設定した（図版 36 下・37 上）。この地点は、尾根が弧状になり、その西側に約９×５mほどの平坦地がみられた。平坦地と尾根頂部とは２mの高低差がある。尾根頂部から平坦地にかけて堆積する黄褐色土（第２層）は地滑りによってずれていた。さらにその下の斜面では倒木痕（第６～８層）がみられた。平坦地は表土直下で地山の粘質土ないし岩盤に達する（第 67 図）。遺構・遺物とも検出されなかった。尾根上・平坦地ともに造成した痕跡が確認されなかったことから、土砂の流出などによってできた自然地形の可能性が考えられる。２～４トレンチは根がやや広くなっている地点に設定した。いずれのトレンチも表土直下で地山に達し、遺構・遺物とも検出されなかった（図版 36 下）。５～８トレンチは広い平坦地になっている地点に設定した（図版 36 上）。現在、植林されているが、それ以前は畑として利用されていた。トレンチ 5･6 の北側には谷筋に沿って幅 60 ～ 80㎝ほどの道が通っている（第 68 図）。道沿いに平坦地がひな壇状にみられる。このうち杭 FFV.5 のある平坦地には、文政元年（1818）、同七年（1824）の紀年銘のある円頂方形墓標が２基ある。５・６トレンチは表土下に畑の耕作土がある。その下層には堆積土が数層みられた。耕作土層を中心に近世陶磁器が出土している。明確な遺構は検出されなかったが平坦地は畑以前の加工と考えられる。７・８トレンチは表土直下で地山の岩盤に到達した。遺構・遺物とも検出されなかった。

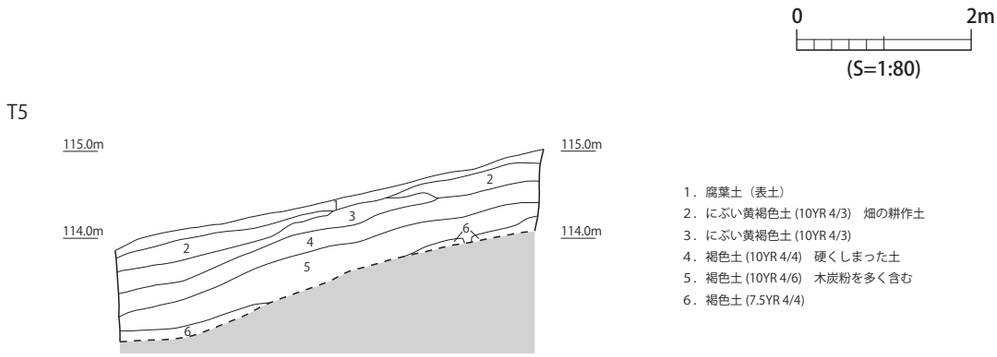
東城蓮城跡出土遺物

図版 39-1 は試掘トレンチ５の２層から出土した。肥前系染付磁器で、外面に梅花文を描く。推定される年代は 18 世紀中葉から後葉とみられる。2 から 4 は試掘トレンチ６の東法面からの採集品である。2 は肥前系波佐見で生産された陶胎染付の丸形碗で、推定される年代は 18 世紀前半とみられる。3 は肥前系染付磁器皿で、見込に蛇ノ目釉剥ぎが施される。推定される年代は 17 世紀末以降とみられる。4 は石見焼の丸形陶器碗。見込に蛇ノ目釉剥ぎが施される。推定される年代は 19 世紀以降とみられる。5 は肥前系磁器碗である。6 はトレンチ６の第４層出土の肥前系唐津の擂鉢。6 条一単位ないし、それ以上の擂目がみられる。推定される年代は 17 世紀代とみられる。



1．腐葉土（表土）
2．黄褐色土 (10YR 5/6) ～にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)
3．橙色土 (7.5YR 6/8)
4．橙色土 (7.5YR 6/6)　白色礫が混ざる
5．黄橙色土 (7.5YR 7/8)　パサパサしたしまりのない土
6．にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) と黄褐色土 (10YR 5/6) が混ざる　未分解有機物を含む
7．黄褐色土 (10YR 5/6)　未分解有機物を含む
8．明黄褐色土 (10YR 6/6)　白色礫ブロックを含む
9．にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)　白色礫ブロックを含む
10．明黄褐色土 (10YR 6/6)　粘性有り
11．にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)　粘性有り
12．にぶい黄橙色土 (10YR 6/4)　粘性有り
13．にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)　粘性有り
14．にぶい黄褐色土 (10YR 5/3)　粘性有り
15．にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
16．明黄褐色土 (10YR 7/6)　パサパサしたしまりのない土
17．橙色土 (7.5YR 6/6)
18．明黄褐色土 (10YR 8/6)　粘性有り
19．橙色土 (7.5YR 6/6)　白色礫を含む
20．明黄褐色土 (10YR 8/6)

第 67 図　東城蓮城跡トレンチ土層図（1）



1．腐葉土（表土）
2．にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)　畑の耕作土
3．にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
4．褐色土 (10YR 4/4)　硬くしまった土
5．褐色土 (10YR 4/6)　木炭粉を多く含む
6．褐色土 (7.5YR 4/4)

第 68 図　東城蓮城跡トレンチ土層図（2）

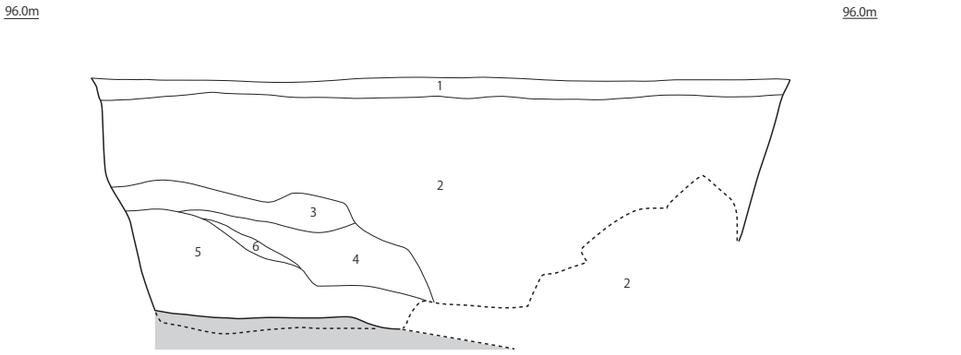
7 はトレンチ 6 の第 9 層出土の土器。内外面ともにハケ目調整が施される。

10．上谷遺跡

上谷（かみだに）遺跡は大田市朝山町朝倉に所在する、遺跡は南北に広がる谷間に広がっている（第 3 図）。東西の丘陵裾部に民家が点在し、谷部全体が水田として利用されている。東側の丘陵裾には仙山川が流れ、西側の丘陵状を国道 9 号に接続する県道池田久手停車場線がはしっている。周辺の遺跡としては、城蓮城跡、朝倉彦命神社館跡の城館遺跡の存在が知られている。調査区は、用地買収が完了している旧水田三枚を対象に計 8 ヶ所設定した。

トレンチ 1　旧水田耕作土（第 1 層）下に圃場整備の造成土（第 2 層）がある（第 69 図）。造成土は東側に向けて厚くなっている。造成土中にはひとかかえ以上の大きさの石が大量に埋め込まれていた（図版 37 下）。これは圃場整備によって付け替えられる前の仙山川を埋め立てたものと確認された。川の西側には護岸のための立杭（径 7 ～ 10㎝、長さ 60 ～ 75㎝）や横木（径 15㎝）が設けられていた。第 4 ～ 6 層も河川堆積層と考えられる。遺物は旧水田耕作土中に須恵器片、陶磁器片、造成土中に陶磁器片が混ざっていた。

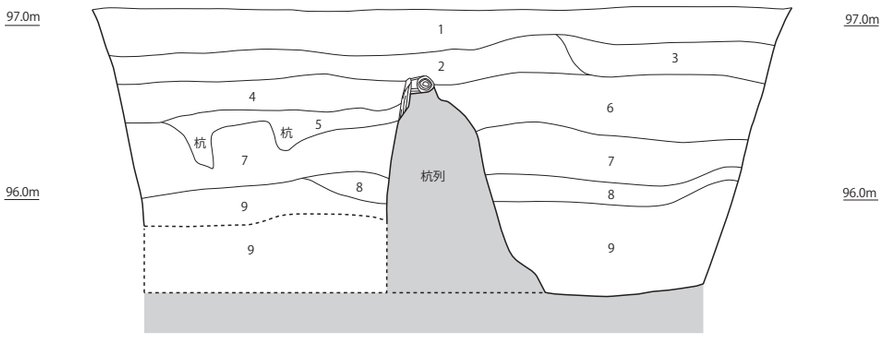
トレンチ 2　圃場整備の造成土下で旧水田の畔杭にあたる杭列と横木が出土した（第 70 図）。圃場整備前は西側の一段高い畑と合わせて一枚の水田として利用されていたようである。圃場整備時に東半分を掘り下げ水田を広げている。杭列は北西から南東方向に並ぶ。角材と丸材があり、太さは径（辺）3.5 ～ 10㎝である。旧水田は西側の丘陵裾部を削り、谷部を 20 ～ 30㎝埋めて造



1．にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) ー水田耕作土
2．圃場整備に伴う造成土（旧仙山川の埋土）
3．褐灰色 (10YR 6/1) ～明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土ー旧水田耕作土か？
4．オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 5/1) 1 ㎝未満の砂礫を含む
5．灰色粘質土 (10YR 5/1)
6．オリーブ灰色砂礫 (2.5GY 5/1)

0　1m
(S=1:40)

第 69 図　上谷遺跡トレンチ 1 土層図



1．褐灰色土 (10YR 6/1) ー水田耕作土
2．褐灰色土 (10YR 6/1)
3．灰黄褐色土 (10YR 4/2)
4．褐灰色粘質土 (10YR 4/1)
5．黄灰色土 (2.5Y 4/1) 細砂と木炭粉混じる
6．オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 5/1)
7．暗オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 4/1)
8．オリーブ灰色土 (2.5GY 6/1)
9．オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 6/1) ～明オリーブ灰色粘質土 (2.5GY 7/1) に数㎝～ 10 数㎝角の砂礫が混じる

0　1m
(S=1:40)

第 70 図　上谷遺跡トレンチ 2 土層図

られている。この造成土下、標高 95.2 mで、地山に達する。

トレンチ 3　旧水田耕作土中・床土下（第 1 ～第 3 層）で北西から南東に並ぶ杭列・横木が出土した。水田畔の保護杭と考えられる。旧水田耕作土から土師器片が一点出土している。下層の第 4 ～ 7 層も水田耕作土と考えられる。第 7 層から須恵器壺の底部が出土している。第 9 層以下は砂礫層を主体とし、粘質土が混ざっている。河川堆積層と考えられるが遺物は混ざっていない。

トレンチ 4　地表から順に、旧水田耕作土、床土、灰色粘質土、圃場整備の造成土が堆積する。造成土は 60㎝掘り下げたところで掘削を停止している。旧水田耕作土から陶磁器片が一点出土している。

トレンチ 5　地表から順に、旧水田耕作土下、床土、旧水田耕作土、砂礫層が堆積する（図版 38 下）。

砂礫層は地表下 70㎝、標高 96.8 mからみられる。砂礫層上から陶磁器片が一点出土しているが、砂礫層に遺物は混ざっていない。

トレンチ６　旧水田耕作土・床土の下は圃場整備に伴う造成土となる。造成土は 1 m近くあり、その下、標高 96.2 mで地山に達する（図版 38 上）。明確な遺構・遺物とも出土しなかった。

まとめ　調査を行った旧水田からは、中世以前の遺構は確認されなかった。遺物のほとんどは、近世以降の陶磁器だが、須恵器・土師器片もわずかにみられた。遺跡地内には上殿屋敷の屋号を持つ民家も存在している。中世以前の遺構は、今回、調査できなかった丘陵裾部に存在する可能性がある。今後、未買収地の水田部とあわせてトレンチ調査が必要と考えられる。　（間野大丞）

上谷遺跡出土遺物

図版 40- 1 は試掘トレンチ 1 の 1 層から出土した須恵器。内外面ともにナデ調整である。2 はトレンチ 1 の 1 層出土の備前の甕。3 はトレンチ 1 の 1 層から出土した肥前系唐津の呉器手陶器碗。推定される年代は 17 世紀後葉から 18 世紀初頭とみられる。4 はトレンチ 1 の 1 層から出土した肥前系唐津の刷毛目皿。推定される年代は 17 世紀末から 18 世紀前葉とみられる。5 はトレンチ 1 の 2 層から出土した肥前系唐津の刷毛目皿。推定される年代は 18 世紀前葉とみられる。6 はトレンチ 1 の 1 層出土。瓦質土器の擂鉢である。7 はトレンチ 1 の 2 層からの出土。佐賀県有田で生産されたものと思われる型紙刷絵によるコバルト染付である。明治 20 年代前後のものとみられる。8 から 10 はトレンチ 1 の 2 層出土の石見焼のこね鉢である。近代のものとみられる。11 は肥前系染付磁器で、灰吹か、もしくは香炉と考えられる。推定される年代は 18 世紀頃とみられる。12 はトレンチ 2 の 1 層出土の中世の中国製青花碗。13 は肥前系青磁染付の朝顔形碗蓋である。推定される年代は 1770 年代前後とみられる。14 はトレンチ 2 の 1 層から出土。肥前系の染付磁器碗である。外面は虫籠文らしき文様が描かれる。推定される年代は 18 世紀後半以降とみられる。15 はトレンチ 2 の 1 層出土。中世の焼締陶器甕である。16 はトレンチ 3 の青灰色粘質土から出土。須恵器の壺の底部である。17 はトレンチ 3 の表土から出土した。土器製の焙烙の底部片と思われる。18 はトレンチ 3 の表土から出土。石見焼の丸形陶器碗である。推定される年代は 19 世紀以降とみられる。19 はトレンチ 4 の排土から出土した。肥前系唐津の陶器甕である。推定される年代は 17 世紀以降とみられる。20 はトレンチ 7 の砂礫層直上からの出土した信楽系の陶器碗である。推定される年代は 19 世紀以降とみられる。

【参考文献】
重根弘和　2003「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集　近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会

（渡辺　聡・平石　充・間野大丞・内田律雄）